

みたい……もう彼女と競う必要もなくなったし、わたしの勝ちね)

新人全員に所属部署を伝えた後、人事の女性は凜のもとに歩み寄り、こう付け加えた。「森下さんは荷物を持って、明朝9時に第3会議室に行ってください。詳しい組織の体制と業務内容はそこで聞いてください」

「わかりました」

◆親方の教え

「もう一度繰り返し返すが、**ビジネスに正解は無い**」

セミナー会場で、最前列に座った香織は、ヒゲを蓄えた神保じんぼという初老の男性の話を聞きながら、熱心にメモを取っていた。

(コンサルタントっていうより、職人の親方って感じ)

決して丁寧とはいえないが、乱暴でもない彼の話し方に、香織は親しみを感じた。

「そこで、現場の人間たちにとって、ビジネスを進める際によく注意しなければならぬものがある。有限で、慎重に使わなければならないものだ。そちらの青いシャツの方、あなたはなんだと思う?」

「そうですねえ……やはり予算、カネでしようか」

セミナーなのに受講者と双方向のやりとりをしていることも好印象だ。質問を受講者側に投げることで、受講者側も考える機会を持つて。

周りの受講者は、ほとんどがスーツ姿の中年男性だった。仕事もバリバリできそうな人ばかりに見える。

「確かに、カネは慎重に使わなければならない。しかし、予算はまれに増やすことができる。たとえば年度末になると、事業部や部署単位でいろいろと買い物が増えるだろう。私も会社勤めだった時には、このレーザーポインターなんかを……いや、そのようなセコい話をしたいわけではないんだが」

そう言って神保が微笑むと、受講者からも笑いがこぼれ、周りの空気が和らいだ。

(有限で慎重に使うべきものって、なんだろう)

香織が思いをめぐらせていると、神保と目が合った。

「では、一番前の……そう、ショートカットのあなた。どうかな」

自分が当てられてしまった。

(有限で慎重に……うーん)

香織はゲームソフトの店頭プロモーションを思い出した。プロモーション動画や販促グッズは計画的に作れるが、それをどう使うかの説明が大変だったのだ。店舗のゲー

ム担当さんをつかまえて、説明して、販促グッズを置かせてもらって、また別の店舗に出向く。その繰り返しだった。

（あれは、人手が足りなかったというより……）

「時間、ですか？」

香織は自信なげに答えた。

「仰る通り。時間は誰にとつても有限だ。新人でもベテランでも」
どうやら間違っただけはなかったらしい。

「そこで時間を節約するのに役立つのが、フレームワークだ。物事をフレームワークにあてはめ、整理することによって、余計な作業や手間が減り、任務を最短で遂行することができる」

神保の言葉は理解できたが、香織は疑念を抱いていた。

（でもフレームワークって、誰にでも使えるわけじゃないよね……）

「皆さんの中には、フレームワークというものを、経営企画部や経営コンサルタントといった人々だけが使いこなす道具だと考えている人もいるだろう。しかし、そうではない。どのような職場でも、どのような人でも使いこなすことができる」

神保は受講者をぐるりと見回し、再び口を開いた。

「フレームワークは誰にでも使える」

受講者は神保の声に意識を集中させていた。

「使い方と使いどころを押さえれば、どんな仕事でも、どんな立場でも役立つものだ。入社10年目でも、新人でも、だ」

神保の力強い言葉に、香織は自然と引き込まれていった。

（フレームワークは、誰にでも使える……）

◆フレームワークに意味はない？

セミナーが終わり、参加者たちがヒゲの講師、神保と名刺交換をしている。

（同じ様なバインダーを持っている受講者が多いけど、団体の研修なのかな）

香織はセミナーの内容を思い出し、改めて考えてみた。

フレームワークを使えば仕事がうまくいくのだろうか。成功するのだろうか。手元のメモに視線を落とす。神保の言葉で、とりわけ印象が強いものを香織は控えていた。

（そういうえば、ビジネスに正解は無いって言うだけだ）

正解が無いならば、なんのためにフレームワークを使うのだろうか。時間を節約できても、仕事が成功しなければ意味が無いのではないか。

（直接訊いてみよう。どうせタダなんだし）

香織は神保の方へ足を向け、ジャケットの内ポケットから革の名刺入れを取り出した。タイミングよく、人の流れが変わった。

「今日はありがとうございます！」

「ああ、さつきはいい回答をありがとうございました！」

神保はさわやかな笑顔を香織に向けた。

「あの、フレームワークを使っても、仕事が成功するとは限らないですよね」

「そうだな。フレームワークを使ったからといって、必ずしも正解にたどり着いたり、競合相手を打ち負かしたりできるわけではない」

（正解にたどり着かないのなら、フレームワークを使う意味なんてあるのかな）
香織の疑問を察知したのか、神保が先に口を開いた。

「フレームワークで情報を整理し、仮説を検証する。やみくもに仕事を進めるよりも、効率的に時間を使えるはずだ。間違いにも早く気がつくだろう」

「間違いに早く気がつく……ですか」

「まずは、フレームワークを実際の仕事に使ってみたらどうかね。『研究ノート』のワークシヨップでやった通りに、自社の状況を……」

「『研究ノート』のワークシヨップってなんですか？」

すると神保は、意外そうな表情を浮かべた。

「『研究ノート』は今回のセミナーの教材として、参加者に事前に送ったはずなのだが……手違いがあったようだな。申し訳ない。再送するから、名刺をいただけるとかな」

「はい、よろしくお願いします」

礼を言いながら、香織は神保と名刺を交換した。

「ZAIN社ということは、八幡さんの代理かね？」

「はい、そうです。私は八幡の代理です」

なぜ部長の代理だとわかるのか、香織は疑問に思った。

「そうか、八幡さんのところに『研究ノート』が送られているはずなんだが、確認しておいてもらえるかな。しかし、手間を増やしてしまったようで、すまない」

「いえ、今日はありがとうございます」

香織は礼を言い、神保武と書かれた名刺を手に、セミナー会場を後にした。